

# 大学院での学び直しに関する一考察

## — 博士後期課程編 —

### A Study on Re-learning in Doctoral Course

岩崎 久志\*

Hisashi Iwasaki

大学院博士後期課程で学ぶ社会人にとっての「学び直し」の意味と価値について、現象学的アプローチによって迫ることを試みた。そのうえで、本研究では、現職の大学教員3名に聞き取りを行い、その「語り」の分析を通して、代表的な既存の現象学的アプローチの方法論を批判的に検討し、量的研究のパラダイムとは異なる、現象学的質的研究のあり方やその独自性について考察した。

キーワード：学び直し、大学院博士後期課程、大学教員、現象学的質的研究、語り

## I. はじめに

最近、「人生100年時代」という言葉をよく耳にするようになった。少子高齢社会と言われて久しい日本だが、いよいよ100歳まで生きることが珍しくないという、超長寿社会の到来が唱えられるようになってきた。

高齢社会となって久しいわが国では、すでに生涯を通しての社会人の学び直しのあり方が模索されてきている。しかしながら、社会人の学び直しは、まだ日本で十分に根付いているとは言い難い状況にあり、社会人を取り巻く環境をはじめ、大学等により提供されるプログラムの改善・充実に関する問題など、さまざまな課題が指摘されている。

一方、近年の社会人の学び直しに係る取り組みは、「社会人の学び直しを推進する『職業実践力育成プログラム』認定制度」(文部科学省, 2015)<sup>1)</sup>等に関する資料を見る限り、主に労働生産性の向上を実現するために、新たに必要とされる知識や能力等を身に付けていくことを目的とするものであることがうかがえる。

本小稿では、社会人経験を経て大学教員となり、大学院博士後期課程において学び直した3名を対象に聞き取りをした「語り」の分析を行った。それを通して、以下の2点を明らかにすることを試みたものである。①大学院博士後期課程にてリカレント教育を経験した社会人の、その人にとっての「学び直し」の意味や価値に、現象学的な視点から迫ること。②先行研究の知見等に

---

\*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

(2020年3月27日受理)

©2020 UMDS Research Association

対する批判的な検討により、現象学的質的研究のあり方を探求する。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 現象学的アプローチ<sup>2)</sup>による聞き取り

社会人経験を経て大学教員となり、大学院博士後期課程で学び直しをしている人および修了した人を対象に聞き取りを行ない、現象学的アプローチによりその「語り」を分析した。ここで言う現象学的とは、事実そのものに立ち返り、体験しているその人の側からその人の体験世界を理解しようとする態度を意味している。そのためには、まず意識の外部に客観的な世界が実在する、という確信を一旦保留（エポケー）し、それにもかかわらず世界の実在性を確信するのはなぜかという、その根拠を考えることになる。

聞き取りの方法としては、現象学的な視点から、半構造化面接を採用した。協力者の選定については、原則としてスノーボール方式を採用した。そこでは、①学び直しの動機とそこに至る経緯、②学び直しの感想と自己変容について、③学び直し後の生活の変化とキャリアへの影響、④学び直しの課題、などについて聞き取りを行なった。ただし、聞き取りでは全員に上記の質問すべてをしたわけではない。研究協力者の語りの流れに沿って対話することを重視したためである。そのことによって、研究協力者自身もはっきりとは自覚していない経験の前意識的な部分へと接近できるかもしれないと考えたからである。

もとより、本研究では社会人大学院での学び直しという経験の共通項を示すことが目的ではない。あくまでも質的な研究として、その人にとっての「学び直し」の意味や価値に、現象学的な視点から迫ることにある。「語り」をとおして、「学び直し」という「生きられた経験」を明らかにするとともに、場合によっては一般的構造を見いだそうとするものである。

以下に引用・分析する「語り」は、2018年8月から2019年5月にかけて筆者が行った「学び直し」に関する聞き取り調査<sup>3)</sup>により得られた内容である。計15名の方から貴重な「学び直し」の体験について聞き取りをさせていただくことができた。そのなかから、ここでは大学院博士後期課程での学び直しについて、3名の方の「語り」について分析する。

面接は、プライバシーが保てる場所にて実施した。聞き取りに先立ち、あらためて本研究および調査の内容について書面および口頭による説明を行なった。また、了解を得たうえで聞き取りの内容をICレコーダーによって録音した。なお、面接に際しては、十分な倫理的配慮<sup>4)</sup>を行い、協力者の人権とプライバシーを損なわないよう心掛けた。なお、大学等の固有名は記号によってボカして表記していることを断っておく。

インタビューは一人に対して約1時間から1時間30分をかけて行なった。後日、録音内容のスク립ト化（いわゆるテープ起こし）が完了した時点で、研究協力者（語り手）に聞き取りのデータ（逐語録）を確認してもらい、誤記の修正等を施していただいた。さらに、必要に応じて、再

度の面接を依頼し、面接内容の確認や追加の聞き取りを行なったケースもある。

## 2. 先行研究の批判的検討

近年、現象学的アプローチは、看護の分野をはじめ、対人援助を中心に種々の学問分野で用いられており、各領域に応じた方法論にアレンジされて展開されてきている。対人援助の領域だけではなく、質的研究全般においても、研究協力者や対象者の「生きられた経験」を明らかにするための方法<sup>5)</sup>、あるいは、より広く相手を理解するための方法などとして、現象学的アプローチを採用する理由に言及されることは多い。しかしながら、現象学的アプローチ自体の定義や概念に言及した論考はほとんど見受けられない。

そのなかで、数少ない言及の一つとして、現象学的アプローチを概念化したのが、現象学的心理学者のA・ジオルジ (Amedeo Giorgi, 1931-) だとされる。ジオルジはフッサール現象学の流れをくむ現象学的心理学者である。そして、その中心は、「人間が体験する世界のありのままの認識、生きられた世界の意味の理解におかれている」としている<sup>6)</sup>。これは、そこに生じている出来事を客観的に捉えるのではなく、むしろ生活世界のうちにありつつ、意味や体験を考えていこうとするものといえる。

現象学的な視点では、研究協力者の体験について、それを外側から客観的に説明するのではなく、当事者がそれをどのように体験しているかを内側から考察し、そのなかから体験の構造や本質といったある種の一般性をもったものを取りだそうとする姿勢が重視される。それは換言すれば、「個性記述の一般化」をめざすことともいえる。

上記の視点からみると、代表的な現象学的アプローチとされるジオルジの方法論に対しても、問題点があることを指摘せざるを得ない。そこでは、個人的な経験の個別的な意味よりも、科学としての厳密な手続きにより、ある程度の一般化が必要との認識が色濃く感じられるのである。本小稿では、研究協力者への聞き取りによる「語り」の分析を踏まえて、現象学的アプローチの方法論のあり方についても検討する。

## Ⅲ. 研究協力者への聞き取り

ここでは、3名の研究協力者への聞き取り内容を提示する。なお、記載方法として、聞き手である筆者の発言は《 》で示した。また、( )内は筆者による補足である。

### 1. Aさん(60代後半・男性)

Aさんは「まちづくり」や環境デザインを専門とする大学教授である。聞き取りは2019年2月、関西のある都市の郊外にあるAさんの大学の個人研究室にて行った。実務家から大学に転身したAさんは、専任の大学教員になって約10年が経とうとしている。そして、2019年の3月末

で定年退職を迎えることになっている。

Aさんのキャリアはとてもユニークである。専任の大学教員でありながら、いまでも自身の事務所を構え、コンサルティングの仕事を行なっている。まずはその経歴について、ご本人は以下のように語っている。

A：ぼくは工業高校（の卒業）でそれからデザイナーをめざして、それもぼろぼろ変わりましたけど。で、高校一応デザイナーでこれ卒業したんが21歳くらいですね、1950年生まれなんで。で、そこからデザイン関係のところに、何年かな、何年か就職して、で、独立をさせていただいて、で、大体30歳くらいのときに独立したんですかね。で、ずっとデザイン事務所をやってまして、で、30代後半ぐらいですかね、結局デザイナーというのは感性がなかったら落ちるというのがなんとなくわかってきた。で、その当時一緒に仕事したコンサルタントの人、中小企業診断士の人も、一緒になんかそんな仕事せえへんかって声かけられて。で、それからまあぼくは設計の方なんで、施設とかそっちの方ですんで。ハードのコンサルタントとしていろいろずっとやっております。

もともと工業高校でデザインを学んだAさんだが、独立してデザイン事務所を営んでいるなかで、「デザイナーというのは感性がなかったら落ちるというのがなんとなくわかってきた」ころ、仕事仲間の中小企業診断士から、一緒に「ハードのコンサルタント」の仕事をしなかと誘われる。その仕事は順調に盛況となっていくのだが、Aさんはある危機感を抱いて学び直しの必要性を感じることになる。1993年のことだという。

A：ちょうどぼくが43ぐらいでちょうど厄年越えたぐらいで、それ以前は何年かバブルのころで。むちゃくちゃ儲けたんですわ。恐ろしいぐらい。で、ちょっと怖くなって、ほんまやったらもうコンサルタントでこのままずっとやったらいいけど、ちょっと怖いから、何かちょっと予防線を張らないかと。そういうてるときに、たまたま（私の）結婚式の仲人した人が、ある大学の、まあ短大なんですけど、地方の。お前もう一回勉強し直したらどうやねんと。ちょうど学長だったんで、「引っ張ったるで」という話があったんで、これはもうまったく打算。それで「わかりました」というて。で、ぼくは結局そのときまで高卒ですから、あと各種学校卒ですから。通信でもええから行ってこいと。それが〇〇大学の社会学部（通信課程）なんですよ。で、それコンサルしながら一応4年でね、卒業したんですよ。

本小稿は大学院博士後期課程での学び直しに関する聞き取りを主眼に置いている。そこに至るまでのAさんの道程は、まだこれからであるが、順を追ってみていこう。

A：それで一応4年で卒業して、で、さあこれでほくも大学の先生なれる思ったときに、その先生が病気で亡くなったと。恐ろしい。癌で亡くなって。で、そのときにまあ今も一緒に事務所の人がですね、コンサルタント仲間の人が、その人も今は大学の先生なんですけど。やっぱり修士（課程）は行かなあかんと。やっぱりそうですかね、いうて。それで修士どこ行ったらええかな、ほくはマーケティングの専門ではなかったんですけど、なんか本は読んどったんやけど系統的にあんまりそれできひん（身についていない）から、んで、△△大学の社会人MBAに（学びに）行ってたんです。

《商学研究科、いわゆるMBAですね。》

A：そこで2年、実際は2年半かかった。というのはなんか論文の登録のちょっと仕方が、修論の登録の仕方が悪かって、それで一応2年半で。さあこれでぼちぼち大学の先生なれるかなと思ったらやっぱり博士号（が必要）やろって。ほんでまた博士課程に行くことになったんですが、で、そのときにたまたまその知り合いの人が××大学工学部の大学院が英語は大丈夫ちゃうかっていう話があったんで、試験。で、たまたま行ったらちょうど一人枠空いとったんで、で、そこは工学部なんですよ。で、ほくそのデザインとか設計とかやとったんで、最後は工学部でもええわという気があって、で、工学部の大学院へ行って、これがなんと6年ぐらいかかるとるはずなんですよ。これがなかなかね、査読ありの論文一本書くの3年ぐらいかかったんと、やっぱり単位をなんぼか取らないかんかったんで、1、2年はもうほとんど授業出とって。で、それ（投稿）が3回くらい落とされましたかね、査読（付き論文の投稿審査）で。で、やっと最後の査読でなんとか通していただいて、で、大体6年。そのときがほくちょうど56歳なんですよ。

MBA から工学系の博士後期課程への進学という、ここでもAさんの学び直しはユニークさを発揮している、という感じである。では、Aさんにとっての大学院での学びの体験とは、どのようなものであったのだろうか。

A：MBAはもうほんま一流会社の人ばかりでしたからね。3、40代の。その刺激というのはけっこうありましたし、その間は非常に学び直しをしながら、なんかそういう仲間づくりばかりでしたからね。毎晩飲みに行ったり。その2年はけっこう研究活動しながら、まあいろいろそういう付き合いもできて。人間関係が広がったのは事実ですね。

MBA（修士課程）での学び直しは、刺激がけっこうあり、仲間づくりや研究活動を通して人間

関係も広がっていった面白い体験であったようだ。しかし、その後に進学した博士後期課程では、トーンがずいぶん変わっていったようである。

A：博士はしんどかった、いま考えても。もう二度とあそこは入らんわって。

A：いやほんまくじけそうでしたよ。もうここまできたら何がなんでも卒業しないとあ  
とがないという思いはありました。そのころは意識してましたよ、なんとか大学の教員に  
(なろうと)。だから、ぼく修士ですと公募に出してました。でもそのときには、やっぱり  
もうぼちぼち博士でなかったら（採用されない）って時代に入ってたね。

A：でも学び直しの後もそのままの人なんぼでもおりますもんね。そのまままた会社にお  
さまってる人とか。仕事変わってうまくフリーになっても、失敗したとかいう人も結構いま  
すもんね、そのなかにもね。

当時のAさんをめぐる状況については、博士論文を提出する前提条件である学会誌等における  
査読付き論文の採択と、大学教員への採用という、二重の高い壁を前に悪戦苦闘している、といっ  
た印象を受ける。

A：56歳で、さあそれでもどっか引っ張ってくれるわ思うてけっこう応募したけど、あか  
んかった。書類で全部落ちてましたから。面接までいったことないですもんね。だからもう  
博士号（取得）までいかなあかんという思いはありましたからね。まあそれが支えといった  
ら支えみたいなもんでしたけどね。

A：最後はさすがに疲れましたけどね。もうやめよかって何度思ったかわかりません。ま  
あなんとか粘って粘って。まあそれも自営業やからできたかもわかりませんよね。これサラ  
リーマンやったら絶対やってませんけどね。

その後、Aさんは足掛け6年をかけて、博士後期課程を修了して博士号を取得した。また大学  
教員としての就職についても、たまたま研究会の仲間の一人が勤める大学で非公募の人事があり、  
特任教授として就任することとなった。さらにその後、当該大学で学部再編等の改組が行われ、  
そこを機に専任の教授となり今日に至ることになる。この間の経緯だけをみると、Aさんにとっ  
ては幸運に恵まれたシンデレラストーリーのようなだが、ここでは紙幅的に詳述する余裕がない。  
ただ、その経緯について、当のAさんはどのように受けとめているのだろうか。

A：たまたまその前に辞めた先生と、ちょうど私が研究してきた分野というか知識が多少あったことがかぶったから。[・・・] まあ結果的には、そういう人間のつながりみたいなね。たまたまその経緯があって、Aさんもおったやろいうことで、話がきただけでしたから。そんな話がなかったら、いまだにまだ何しとったかわかりませんけどね。なんか人間のそんな付き合いとかね、いうのはありますよね。縁とかね。まあ、最後は結果ですからね。

このように、意外にも淡々と語るAさんだった。それまでの自身の努力が、現在の立場に結びついているといった思いがあるのかもしれないが、そのところは聞き手として確認しそびれている。最後に、Aさんが学び直しという体験をしたことによって得たものについて聞いてみた。

A：まあ今となればやっぱりまあまあね、うまくいったことには違いないんで。もしほんまにここでもうデザイナーだけやとったんじゃ、もう10年か15年で失速してそれどころやなかったいうのがあるんで、そういう意味ではまさしく学び直しは、まあ打算もありましたけど、ぼくの人生にとっておもしろかったなと言えるかもわかりませんね。

A：学び直しはね、まあそのあとの再就職とか自分のやりたかったこととかそれに通ずるビジネスチャンスとかね、パスポートになる。それと同時に、退職後も自分のその学び直したことが人生設計の中で老後のチョイスのね、なんかそういう一つの活動に老後の人生設計、生き方改革に結びつく、なんかこう言うたらカッコいいんですけどね。

A：デザイナーでしょ、コンサルタント、それから大学教員です。まあ2回変わってますんで。人生ほんま100年時代、先取ったみたいなどころもあると思いながらぼくも感じとったんですけどね。だからあるとこで、コンサルタントをずっとやとつても、ちょっともう失速しとったでしょうね、60歳くらいで。だからそういう意味ではちょっと少し遅れて行きましたけど、最後にこの大学教員いうのは、歳いったらいい仕事やなと最近思いますけどね。若いときはどうか知りませんけど。

Aさんは70歳を目前にしている。老後を視野に入れての学び直しについてのコメントは、ご本人ははにかんでいるような表情で語られたが、聞き手の私には穏やかななかにも、どこか自信に満ちた言葉の強さのようなものが感じられた。

## 2. Bさん（60代前半・男性）

Bさんは、関西にある女子大の福祉系学部の教授である。聞き取りは2019年1月、Bさんが非

常勤講師を務める大学の会議室にて行った。Bさんは社会福祉施設の職員から大学教員に転身し、15年以上になる。Bさんが大学院で学び直しをしたのは、社会福祉施設で働きながらである。学び直しを決意するまでの経緯について、Bさんは以下のように語っている。

B：えっとー、大学を卒業して、それもえっとー、人の普通に卒業するよりも少し時間をかけて卒業して、で、えーっと、あの、自分のやりたい落語家の修行に入ったんです。が、えーっと、なかなかそれも厳しくって、アルバイトに明け暮れてて、で、たまたま、あの一、えー、職があったのが障害児通園施設の指導員という仕事で、そこから障害の子どもたちと付き合うようになって。で、えっと、まああの一、次に大人の施設に移って、そこでまあいろんな福祉施設の、そのなんていうんですかね、裏側みたいななんも見て、で一、その法人を辞めて、で、そのときけっこう心が傷ついた思い出があります。

まあ大きな事故もあって、知的障害者施設で火災があって、8人くらい亡くなった事件があったんですね。もうずいぶん前のことですが。直接それに関わっていたわけではありませんが、まあ勤務してたところがその（似た）ような法人やったので、（転職して）別の法人に変わりました。それで初めて生活保護の施設に勤めたんですね。生活保護の施設ってそんなにあるわけじゃないので、私自身もあんまり知らなくて、働きだしてみたらあの、精神障害者の人ってとっても面白くて、もうほんとに、一般的にはね、ちょっと怖いイメージとかね、心の病気とかもっとストレートなね、表現とかいっぱいあると思いますけど、ぼくも初めて接してみたら全然そんなことなくて、むしろとっても繊細な人が多くって。で、その生活保護法にこう触れるなかで、いっぱい矛盾があって。たとえば、一生懸命働いてもすぐ収入額が認定の限度になってしまっただけでその人が働いた分もらえないということとか、施設を出て地域で自立するときに非常に高いハードルがあるとか、まあそういったもろもろのことがなかでかなーというのがある。で、もともと（私は）法学部だったので、ちゃんと勉強しなくてはいけないなあ。生まれて初めて自分でちゃんと勉強せなあかんと思ったのがそのきっかけで。

で、もうそのとき結婚もして子どももいましたので、まあ家内に、嫁さんに言ったら、「いいinchau」って。変な、あの一、なんていうの、賭け事に狂うとか、女性に狂うとかいうよりも、まあましかっていうので行っていー？ って言ったら行っていーって言うので。探して夜間とか、土日で行けるとこどこかなーと思ったらあの、◇◇大学にそのコースがあって。[・・・] だけでもともと勉強得意じゃないので、修士2年を4年かけて卒業しました。

落語家をめざして卒業後も修行していたということ自体が、すでに稀有な経歴といえよう。だが、Bさんが大学院修士課程で学び直そうと思ったきっかけは、社会福祉施設の職員として働い



ていた仕事を通して痛感した、福祉関連の法律における多くの矛盾や、入所者が施設を出て地域で自立するときの非常に高いハードルといった、もろもろのことだという。

「もともと勉強得意じゃないので、修士2年を4年かけて」修了したBさんだが、その後、臨床教育学という学際領域を専攻とする博士後期課程に入学してさらに学び直しを継続することになる。

B：で、まあなんとか修士終わって、で、だけどなんとなく中途半端やなあと、もうちょっと勉強ちゃんと、ほんまにせなあかんというので、で、だめもとでもうええか思って、博士（後期課程）を受けようと思って。で、そのときも社会人ですから近くで通信とかそんなんまだあんまりなかった。で、探してみたら、あの、□□大学が行けると。[・・・]でもすごい、あの、受験当日行ったらたくさん受験しにきてはりました。うん。百人近くいてはった時期かな。いや、でも5、60人はいたと思います。

Bさんが□□大学の大学院博士後期課程を受験したのは1990年代後半のことである。Bさんの語りからは、当時の社会人の大学院進学へのニーズの高さが、博士後期課程であるにもかかわらず、伝わってくる。

社会福祉施設、しかも管理職としての業務をこなしながら、大学院で学び続けたBさんだが、仕事と学び直しとの両立はどのように図っていたのだろうか。一般に、博士後期課程の場合、修士課程（30単位）と比べてそれほど多くの授業を履修する必要はない。その分、研究や論文作成に膨大なエネルギーを注がなくてはならなくなるのが通例であろう。いずれにしても、一部の研究職等を除いて、フルタイムの仕事をしながらの学び直し（研究）をこなしていくには、並大抵の努力では済まないものがあるのではないだろうか。

そのことに関連して、Bさんの独特なエピソードがある。その語りを以下に紹介する。

B：あるときなんか、大学院（の授業）に間に合わないくらい時間なくって、あの「24時間テレビ」でもらった車で、入浴、移動入浴車ってあるでしょ？

《あー、はいはい。》

B：あれを運転してて、（当時は）施設長してたけどなんでもせなあかんので、時間ないからちょっともうこの車借りるわいうて大学院に飛ばして行って、ほんで大学の裏に止めて、で、授業終わって戻ってきたら、警察がたまってて。駐禁を切られるかと思ったら、入浴？ なんでこんなところに（移動入浴車）があるんや、いうので。で、説明して、えらいこっぴど

く怒られたこともありました。いまは懐かしい思い出です。

Bさんにとって、肝心の学び直しとは、どのような体験だったのだろうか。当時のことを、Bさんは以下のようにふりかえっている。

B：そのときぼくがよう考えてたのは、学部ではぜんぜん勉強してなかったんで、初めて勉強って楽しいんやなど、ちょっと思いました。あの一、全部が全部そうじゃない、論文書くんでも大変でしたけど。はい。でもあの一、先生方の、いわゆる学部のときと違うのは、先生らもやっぱり大人向けの授業してくれたので、あれはすごいいおもしろかったですね。とくに指導教授の先生なんかはね、なかなか本には書かれへん（活字にはできない）ような内容を、とんでもない、でもすごいいおもしろかった。本音やなーと思って。

《それは、院生に対してもなんか、社会人としてちゃんと敬意を払ってくれてる感じとか？》

B：敬意も払うし、ときどき本気で怒る、喧嘩するときもあるし。その先生だけでなく、（他にも大人を相手に）ときどき本気で怒る先生いはりましたよね。おもしろかったですね、あれも。

また、Bさんは、一緒に学んでいた社会人の院生との関係についても触れている。

B：非常にありがたく思ってます。うーん。やっぱりあの、とくにそういう現場と関わりながら勉強している人は、まあ動機はほとんど一緒やと思うんですけど、そういう先生方（社会人院生）からは、けっこう刺激も受けてね、インスパイアされて、こっちも良かったなーと思いますね。はい。だから、いまでもお付き合いをさせてもらっています。

これらのように、Bさんは、仕事と学びの両立に苦心しつつも、大学院での学びの内実や院生仲間との関係についてはとても肯定的にふりかえっている。Bさんは、その後博士論文を仕上げて、社会福祉に関わるテーマにて無事に博士の学位を修得している。では、そもそもBさんが大学院、とくに博士後期課程にまで進学して学び直そうとしたことは、果たして達成できたのだろうか。

《学び直しに至るきっかけとして、現場でのしんどい思いや、いろんな矛盾とか葛藤があったと思うんですが、その辺りのことは大学院を修了されてクリアできたのですか？》

B：クリアはね、まだできてないです。まだずっと引きずってて。社会福祉施設ってね、障害者施設がその、いまでも自分の関心の中心ですけど、広げて社会福祉施設としてとらえた場合ね、やっぱしね、社会福祉施設ってなんであるのっという部分にずっととどまりながら考えてるんですよ。たとえば、老人福祉施設、高齢者の特別養護老人ホームっていまあたりまえに存在しますやん？ で、家族が介護できなくなったら施設だというのがいまの日本のスタンダードになってる。だけど、その、なぜ、本来お家にいたいお年寄りがいれなくなるのかっていうのが、それは介護ができなくなるっていう論理だけなんです。ほんとにはいたいわけですよ。

障害者もいっしょで、知的障害者の人なんかは、ほんまは家族がこの住み慣れた家で住みたいなと思って、いまのところ年いったらやっぱり入所施設に頼らざるを得ないんですね。だから結果的になんにも変ってない。で、それはなにかというと、その一、本人の意思に関係なく社会のなかでそういった人たちをお世話するシステムができたんですよ。だけど、本来の社会福祉の目的って、その人自身の幸せであつたりとか、その人自身のニーズを実現する（ことだ）。じゃあ、そこにズレがあるのを誰もがわかってるけれど、もうシステム上そっちいったらそっちのなかでやっていく（ことになる）。だから、そっちいってまたそっちの権利擁護が必要になるとかね。それは自己決定ですとか、そういう話になって。んー、だから社会福祉のありかた自体が、やっぱりずっとぼくには片付いてないので、いまでもなかなか自分でよう片付けんのですけど、ずっと関心の的であって。（これから）そういう分野でずっとやっていこうと思ってますね。

大学院修了後、Bさんは大学教員に就任することになるのだが、転職するにあたって、上記の「片付いてない」ことへの思いが影響していたことは想像に難くない。その辺りのことも含めて、Bさん自身の変容について、筆者の質問を受けて以下のように語っている。

《博士後期課程を修了された後、大学の教員に転身されるわけですけど、大学の教員になろうと思われた理由は何でしょうか？》

B：うーん、ひとつは、さっき言ったようなことをもうちょっと時間かけてやれる環境を自分で作りたいと思ったので、[・・・] もうひとつは、自分のおかれてた環境、福祉施設というなかで、もうこのままいくとぼくそのとき 40 代半ばでしたので、おそらく自分のポスト、それから自分に与えられる役割とかを考えた場合、自分はさっき言ったような疑問をもったままずっとそれに従事しないといけない。そこでいったん、やっぱ切らないといけないなと思って。で、そこで決心して、大学に籍を変えたということです。だけどまあ、現場好

きやから、ずっと辞めたあとにもいろんな現場とは関わってますけれど、はい。

《いまは大学の教員をされながら、同時に現場とも関わっておられますが、それはやはり、施設オンリーでおられたときとは変わりましたか？》

B：あ、もうぜんぜん変わりました。何が変わったかっていったら、歯に衣着せず言えることができるようになりました。で、けっこうきついこともいっぱい言って、とくに社会福祉の事業をやってる人たちに対する評価は、自分もその中におったので、やっぱりあの一、なんて言うんですかね、その当時あたりまえのことだったけど、それは社会ではあたりまえでないことっていっぱいあるんですね、社会福祉事業のなかで。そのことに対して、厳しく指摘できるようになったんです。最初はそれで干されるかなと思ったけど、あの一、日本社会はちょっと M チックなのかもわかりませんが、けっこう重宝されて（笑）。自治体から国の助成の選考委員になってくれと頼まれたりね。やっぱり、他の人がなかなか指摘しないことを、法人という組織を見るときにね、ここを見るっていうのがぼくなり論理があるんですね。それはもう、非常に役に立っていて、まあ法律的な、たとえば、ある法政策の中でのズレがずいぶんあるっていうことも言えるようになりましたね。

《Bさんがそういうふう現場に対して、ある種のフィードバックもできたりっていうのは、ご自身が現場で体験されてきたからですかね。実践経験を積まないままに大学院とかに進学して何か意見を言うのとは、それはぜんぜん重みが…。》

B：ぜんぜん違うでしょうね、はい。だからたぶん、周りの人はうっとうしいと思ってる。

現場に苦言を呈するBさんに対して、「周りの人はうっとうしいと思ってる」と語るBさんだが、その表情はすこぶるさわやかな感じである。最後に、これから学び直しをしようかと考えている社会人に対して何か言いたいことがあればと聞いてみた。

B：いやぜひ（学び直しに）行くべきだと思いますよ。あの、頭ってすごい刺激を受けるので、知識の刺激を受けるのって、じつは何事よりもすごい良い刺激で、ぼくみたいにほんと半分寝てるような脳みそをときどきこう、しばいてくれて、それは非常にうれしかったです。で、その受け方が、学部生のときの授業と違って、対話して、ときには（教員とも）議論して、ぼくがそれまで受けてきた教育の中ではなかなかなかった。だけど、社会人入学をして、ほんと自分の時間を割いて行って、先生もこちら話を聞いて、自分はこう思うっ

てことを言ってくれて。あ、ほんとに学ぶってこういうことなんやなっていうのを感じて、私にはすごい良い体験でしたね。

### 3. Cさん（60代前半・男性）

Cさんは首都圏近郊にある人文・社会科学系の私立大学の教授である。専門は教育福祉や教育行政などで、教育面では主にソーシャルワーカー（社会福祉士）の養成に携わっている。聞き取りは2019年3月、Cさんの大学の個人研究室にて行った。

Cさんは、東海地方の出身で、地方の国立大学を卒業後、教員養成系国立大学の大学院修士課程に進学した。もともとは博士課程にて学ぶことも視野に入れていたが、修士課程修了後に家庭の事情等で非常勤の学校教員として就職する。翌年、専門学校の専任教員に転職し、さらに社会福祉系の専門学校に移って介護福祉士の養成に携わりながら、その間にCさん自身も大学の通信課程で社会福祉を学び、社会福祉士の資格を取得している。

その後、大学教員の職を得て、いくつかの大学での教歴を経て、今年度から現職に就任している。約14年間勤めた前任校では、学長補佐の要職も担っていた。また、Cさんは臨床心理士の資格も取得していて、大学で教鞭をとるかたわら、学校現場でスクールカウンセラーとして現在も支援に携わっている。そして10年近く前から、大学院博士後期課程にも籍を置き、博士論文の作成に向けて学び直しを続けている。

上記のように、Cさんの経歴は紆余曲折を経ている。それを辿っていくのも興味深いのだが、残念ながら紙幅の都合で詳述は断念せざるを得ない。ここでは、Cさんが専任の大学教授でありながら、大学院博士後期課程で学び直すことに至った経緯を中心に、語りをみていくことにする。

C：キャリア的には、自分で言うのもなんだけれども、ある種自分ではもう上りのポストっていうかね、◆◆大学の学部だけでも自分的にはもうできすぎかなとは思ってたんですけどね。4年制の大学に行った（勤めた）ということだね。[・・・]一応審査を受けて、大学院の教員にもなった。自分としてはできすぎくらい、大学院のほうも教えられるっていうことだね。でまあそれでも良かったんですけど、ただやっぱり自分のこれから先のことを考えるときに、いつまでも学部の学生だけ相手にして、年取ってから大変な思いっていうのもね。やっぱり自分の研究とか、自分のこれからもっとやっていきたいテーマが出てきたときにね、研究者を養成するような道もあるのかなってことで。まあそれも確たるものがあるわけじゃなくて一つの可能性として。いつもそうなんです。だからこれだって決めていくっていう生き方はたぶん今までしてきてないですね。いつも選択肢を探しながら、見つけながらこういう可能性があるんだったらこういうことも必要かなっていうことで、そのひとつとしてやっぱ（博士の）学位があるといいなっていうのもね。それとあとやっぱ学部のときに、

できれば博士課程に行きたかったって思いもね。若い頃にちょっとあったんですね。

それと、やっぱりこれから学生の論文指導とかしていくときに、博士号を取得するための学生を指導していくのに、やっぱりどういう指導をすればいいのかっていうのもね。博士課程にいないと、なかなか指導、自分が指導受けないと学生に指導もね。そのままいてある程度修士課程で修士の学位を出せば、そのまま博士課程の教員になる道もたぶんあるんですよ、博士号がなくてもね。でもやっぱり自分が受けたことない教育を学生にするっていうのはね。まあそういう思いもあって、それで受けたんですよ。

4年制大学の専任教員を長年にわたって勤め、教授に昇格し、審査を受けて大学院の教員にもなった。Cさん自身が語るように、大学教員として「もう上りのポスト」を得ているといえる。それにもかかわらず、Cさんは大学院博士後期課程（教育学研究科）で学び直すことを決意する。そこには、学部の学生だけを相手にするのではなく、「研究者を養成するような道」や「博士号を取得するための学生を指導していく」という展望を視野に入れた可能性が想定されている。また、自身が学部生時代に「博士課程に行きたかった」という思いも影響しているようである。

Cさんは、首都圏にある、日本を代表するとされる私立大学の●●大学大学院博士後期課程に在籍し、現在も学位論文の作成に取り組んでいる（休学期間を含めて9年目）。論文のテーマは、教育福祉や教育行政の制度化に関する研究になるとのことである。●●大学の博士後期課程に入学して、Cさんは、それまでの大学に対する見方が変わったと述べている。「学び直し」を考えるうえで興味深い「語り」と考えられるので、その部分を紹介しておくこととする。

C：なんていうのかな。大学に対するこうイメージっていうか、思い、受験する時からそうなんですけど、どちらかというと自分が貧しかったっていうのもあって、国公立、大学はやっぱり国公立信奉者っていうかね。私立の大学に対してはあまり関心持ってなかったし、若いころも。だから●●大学も、いまでこそ早稲田とか慶応とかね、そういう偏差値の高い私立の大学って確かにすごいなとは思うんですけど、そういう大学よりも地方の国立大の方がね、まだわれわれの時代なんかは、古い人ってそういうところありますよね。ただまあそれが崩れて、いま国立大から私立の方にどんどん先生たちがね、大学教員が流れてくるような時代になってきて、やっぱりそういう大学に対する価値観というのが、●●大学に入っ

・  
・

博士課程だったら別に授業はね、受けないんですね。ただまあ副専攻で歴史の方のゼミを受けたりとか。意欲のある人は、けっこう自分のテーマに応じて教育社会学とか、他の領域

の先生たちのゼミに顔だしてる院生の人もいますよ。ぼくは、歴史と教育行政の方しか出てなかったんですけど、統計の勉強をしたいと思ってたので、そういう大学院の授業受けてたんですね。ほんとに基礎から教えてくれるような。あと他学部にも質的研究で有名な先生がいるんですけど、その先生の授業も受けました。アメリカで学位を取ってきて統計の授業をやられてる先生なんかの授業を受けたりしたら、やっぱり違うなと思いました。レベルの高さもそうですし、教え方もやっぱりアメリカナイズされてるような、進め方とか。そういうのはすごく刺激になりました。やっぱり自分が大学で教える立場、同じ教える立場として、やっぱりこう、しっかり学生に伝えていかないといけないんだなって。技術っていうか、やり方に対してね。そういう学びもあったし、あとやっぱり中に入ってみてびっくりしたのはすごい科目数の多さ。●●大学はすごく多様な科目がたくさんあって、やっぱり国立大学に比べると、学生がほんとに、勉強したいと思ってる学生にとってはね、すごい学び、深い広い学びができるんだなって、あらためて。たぶん●●大学に行っていけば、いまだに大学は国立大しかだめだよって言うたかもしれないんだけど。でもやっぱり大学ってそういう幅の広さっていうかね。私立も捨てたものじゃないなっていうのはあらためて思いましたね。

私立大学に対する評価の変容に加えて、自らも大学で教える立場にあるCさんは、授業の仕方についても関心を抱き、大いに刺激を受けたようである。また、上記の語りでも触れられているが、博士後期課程における学び直しとは、Cさん自身にとってはどのように体験されているのだろうか。続いて、大学院研究科において中核的な位置を占めていると思われる講座とゼミでの学びや交流について、Cさんの語りに沿ってみていこう。

C:ゼミによって違うんですけど、でも●●大学の教育学研究科はどのゼミもやっぱりアットホームっていうか、先生たちや院生との間ですごく親密な関係持ってますかね。歴史の方の先生のところなんか、その先生のところには一年間ずっと毎週通ってたんですけど、ゼミが終わるたびに食事に誘ってくれてみんなで飲みに行ったり、お金その先生が全部出してくれたりとかね、われわれ社会人なんかのお金も全部それで食事代とかも出してくれたりとかして。それをやっぱりそういう博士課程のある大学院の良さっていうのは、そこで学会なんか開きますよね。で、●●大学でも教育系の学会をぼくが在籍していた時にやりましたし、そういうところでいろいろお手伝いしたりとか、そういうなかでこう、スタッフとして院生同士のつながりとか、そういうのも、こうやってつながって深まっていくなかって。

《院生には、いろいろなバックボーンの方がおられるんですか?》

C：そうですね。これも本当に講座っていうか先生の領域によって違うんですけども、外国人の方が結構いるところもありますね。教育史の先生のところは、女性なんですけど、中国とか台湾とか、すごく優秀な方が来てました。うちの教育行政の方も、韓国の、日本でいう文科省に当たるようなところで役人をやってた人が職を辞めて学位を取りに来て。その先生はやっぱり力がある方なんで、3年間でちゃんと論文書いて学位取って、韓国に戻っていかれました。だからそういうつながりもありますよね。外国から来た方達との交流なんかもね、博士課程なんかになってくるとね。

《先生と同じようなお立場の方もおられたりするんですか？ たとえば大学の教員をされている方とか。》

C：それは居ます。今ちょうど一緒にいる先生は、女子大で教育学を教える先生が在籍してます。[・・・] その先生も教育行政が専門で、そういうつながりもあって、学位を取るということで●●大学に来てるんですけども。あと、院生で課程博はもう過ぎちゃって、助手してて、採用があって地方国立大学の方に行かれてる方なんかもね。その方ももう課程博の権利は無いんですけども、論文、論博で書くための準備をしています。で、うちの今の教育行政の先生のところはスカイプも使ってゼミをやるんですよ。だから地方の大学に教員として勤めている院生たちは、スカイプでゼミに参加してますね。

《そのゼミの時間に、その場でスカイプで参加されている…。》

C：そうそう。そこでいろいろディスカッションとかね、やったりしてますね。だから学会、メインは教育行政学会なんですけど、必ず飲み会とか一堂に会したり、その方たちが発表するときには現役の院生なんかもね、つながりがあるんで聞きに行ったりとかして、交流はずっと切れないで毎年その先生の誕生日には、サプライズになってないんですけど、わかるから。でも一応はサプライズのような形で誕生会を開いていますかね。それもやっぱりその先生の信望というかね、すごくいい先生なので、みんなが慕って。ほくも今年で9年目に入っているんですけど、1年休学期間があって、本当は今年で8年目か、あと1年ありますので、在籍期間が。論文、課程博が9年目かな、ずっと通っていますから。たぶん他の先生のところだったらまあどこかでもう切れていたかなと思いますけどね。

Cさんが学んでいる博士後期課程には、現職の大学教員も居れば、地方や海外からも多様な背景をもつ人が集まっているという。なかには国会議員の秘書をしていた人も居たという。また、



語りからは指導教員との親交も篤いことがうかがわれて、ゼミの交流を通して多くの刺激を受けている様子が垣間見えるようだ。そこであらためて、Cさんにとっての博士後期課程における学ぶ喜びについて聞いてみた。

《いまさらですけど、博士課程で学び直す喜びということに関してはいかかでしょうか。》

C：たぶんね。これ一人で、たとえば博士課程三年で終えて、あとはご自由についていう風に、課程博の期間はこれだけあるんで、それまでにいけば課程博士になって、それ以後は論博（論文博士、以下同じ）だよ、論博ですよってことで、三年で終えて研究室にだけ通っていたら、たぶんもう気力続いてないと思いますね。今は、学籍はもう離れていますけど、満期退学になっても、こうやって週に一回でもゼミに通って先生とか若い院生の人たちと顔合わすことで、なんとかこうつながってる部分がね。博論（博士論文）書かないといけないうて。もうとっくにたぶん通ってなければね、切れちゃってるところあるかもしれないですね。そういう人多いでもんね。

《ある意味では、博士論文をこれからまとめないといけないということが先生の励みっていうか、なんか目標になっているのかと…。》

C：目標にはなってますね。ひとつは人生の締めくくり、まあそのひとつではあるかな。課程博（士）の期間、たとえばそれまでにいせなかったとしてもね、論博になったとしても、やっぱりこれで出さないで死んでいったらたぶん後悔するだろうなというのはね。やっぱりこうひとつの区切りとしては、大学教員を続ける続けられないにかかわらずにね。人生のひとつの目標としてそれを出すってのは、ひとつの自分の何か区切りと考えているところはあると思いますね。

《あと、大学院を修了されて得られたものについてですが、まあ、もう聞くまでもないという感じで、それはひしひしとお話しのなかで伝わって来る感じなのですが…。》

C：でも考えてみればね、今までの、来年で10年目になるんですけど、考えてみたらどの校種よりも長く行ってるわけですよ。小学校、中学校、高校、大学、大学院通じてね。こんだけ通ったところないですからね。だからといって中のこと全部知ってるわけじゃないんですけど、本当に狭いね、院への通学っていうかね、通ってる範囲なんですけど。でもまあこれだけ関わったというのよね。

上記の語りの内容に関連して、Cさんはまた下記のようにも述べている。

C：自分としては学位がこの先どうなるかわからないんですけどね、やっぱり博士課程を一応満期退学であったとしても、そこに籍を置いたってということがひとつの自信というか、にはなりますかね。やっぱりこう業績とか学歴とか書いていく時に、いつも他の先生の履歴とか学歴とか見た時にやっぱり修士で止まっているとやっぱりちょっとコンプレックスというかね、そういうものはたぶん。人によって持つ人は持つか。ほくなんかもやっぱりそういうところはすごくコンプレックスになってた部分もあったかも知れないですね。

「ほくなんかもやっぱりそういうところはすごくコンプレックスになってた部分もあったかも知れない」とのコメントは、これまでの、実利的なこととはかけ離れたように捉えられる、Cさんの学び直しに対する語りに込められた思いとは、いささかトーンの異なる内容として受けとれなくもない。それでも、いやだからこそ、聞き手である筆者には、敢えて触れる必要もない自らの「コンプレックスになってた部分」について語ってくれた、Cさんの誠実な人柄に触れたように思われた。

## IV. 考察

### 1. 学び直しの構造の検討

まずは、研究協力者3名の簡単なプロフィールを下表にまとめておく。

表 1. 大学院修了者（研究協力者）のプロフィール

研究協力者	年代・性別	在学時の年齢 (博士後期課程)	研究科の分野*	在学期間の職業
Aさん	60代後半・男性	50代 (6年間在籍)	工学系	コンサルタント業(個人事業主)
Bさん	60代前半・男性	40～50代	教育系 (夜間開講)	社会福祉法人の職員(施設長)
Cさん	50代後半・男性	40代～50代(現在) (在籍9年目)	教育系	福祉系の大学教員(教授)

\* 研究科の分野については、文部科学省の学校基本調査の分類と一致するものではない。

本研究は、もとより社会人大学院（博士後期課程）での学び直しにおいて、経験の共通項を示すことが目的ではない。先述のように、あくまでも質的な研究として、その人にとっての「学び直し」の意味や価値に、現象学的な視点から迫ることにある。具体的には、「語り」の分析をと

して、その人にとっての「学び直し」という「生きられた経験」の意味や価値を明らかにすることをめざすものである。

したがって、博士後期課程で学び直す人には、こういう属性があり、これこれこういう人だ、といったことを明らかにしようとするものではない。それでも、「学び直し」という経験自体に存すると考えられる、構造のようなものはみてとれるように思う。そのあり様が、個別の経験に今日的なりアリティをもたらし、「語り」に触れる者を触発するのではないだろうか。

たとえば、先に触れた 2018 年度～2019 年度にかけて筆者が行った「学び直し」に関する聞き取り調査<sup>3)</sup>において、6 名の研究協力者（本小稿において分析対象となっている 3 名は含まず）の学び直しに通底する構造を分析し、そこにみられる要素として、学び直しへの「内発的な動機(?)」、「大変な状況での学ぶ喜び」、「院生同士のつながり」、「『モノの見方』の変化」の 4 つを抽出している<sup>7)</sup>。これらを「生きられた体験」の流れに則して位置づけ、学び直しの構造的な諸相を明らかにするべく探究している。

上記の分析は、本小稿において聞き取りの「語り」をみてきた 3 名の研究協力者についてもあてはまるところがあり、博士後期課程での「学び直し」の経験においても近似の構造的な諸相が見受けられるといえるかもしれない。しかしながら、そのように結果をある種「整理する」ことは、ともすれば、その人にとっての「生きられた経験」を他者と併せて一括りにしてしまうことにつながりかねない。それでは、ただ構造という名の共通項を並べ立てることに陥り、「学び直し」の意味や価値に、現象学的な視点から迫ることを放棄することになってしまう。

そこで、次項では、今日の代表的な現象学的アプローチとされるジオルジによる方法論を批判的に検討することをおして、「生きられた経験」の意味と価値に迫るための現象学的質的研究のあり方について考察する。

## 2. 現象学的質的研究のあり方について

ジオルジは、先述のように、フッサール現象学の流れをくむ現象学的心理学者であり、現代における代表的な現象学的研究者の一人とされる。ジオルジによる現象学的アプローチは、分析方法として、以下の 3 つのステップから成っている<sup>8)</sup>。そこでは、一事例のインタビュー・データを重視し、研究協力者等の対象者が生きてきた当該の経験について、可能な限り完全な記述と分析を行うとされる<sup>9)</sup>。

- ①全体の意味を求めて読む：記述全体の感じをつかむために記述の総体を読み込む。
- ②意味単位の識別化：このステップの目的は、記述の内部に含まれている意味単位を確立すること(記述全体を現象学的な意味のまとまりとして大まかに区切っていく)。
- ③参加者の自然的態度の表現を、現象学的心理学的に感受性のある表現に変換する：意味単位とその詳細な記述へと再び立ち返る。

このように、分析方法の手続きはシンプルである。また、質的研究として、分析の視点や切り口に対する間口の広さが確保されていて、研究の自由度が高くなっているといえる。そのことがかえって、現象学による研究は難しい、と言われる所以でもあるように思われる。それは、現象学的質的研究には、あらかじめ決まった手順やマニュアルがないからといえよう。

現象学的アプローチの対象となる記述は、多様な表現や形式の中に見いだされ得る。インタビューのデータ、記事、日記、物語、エピソードの記述、映像など、じつにさまざまである。それらのなかから、本書ではインタビューの聞き取りによる「語り」について検討している。ただし、いずれの対象を扱う方法にも共通していることは、研究者自身の先入見をカッコに入れ、その記述（インタビューや種々の記録等）をひたすら精読し、そこに記されたメッセージ（意図されたものに限らない）を掴むことに力を注ぐことが重要になるということである。

現象学的研究を行う者は、個別の研究テーマや対象によって方法を変える必要がある。そして、得られたデータをテキストとして、繰り返し読み込み、意味の単位に分けていく。そこには、たとえば、グラウンデッド・セオリー・アプローチにおけるコード化やラベリングといった具体的な手法はなく、研究者自らの判断と分析によって「本質的な意味」を見出していかななくてはならない。これは、経験の少ない研究者にとっては、何を手がかりにして分析をすればいいのか、困ってしまうことになるだろう。

ジオルジの現象学的アプローチに話題をもどそう。問題点としては、ジオルジには、一事例のインタビュー・データを重視するとしながらも、一方で、量的研究におけるエビデンスを重視する考えから脱し切れていない面があると思われる節がある。ジオルジは、現象学的研究に必要なデータ量について、「収集される生データの量にも依存するが、少なくとも3人の被験者が常に必要とされる。これは、生データにバリエーションを持たせることが重要だからである」<sup>10)</sup>と述べているからである。

しかしながら、現象学的研究とは、たとえ単独のケースであっても、その事例に対する忠実で厳密な記述を積み重ねていくことによって、「生きられた経験」の意味の解明と、具体的意味から普遍的な意味である本質に近づいていく、という考えに基づいている。そこでは、質的社会調査などにおける「他者の合理性」を重視することになる。それはつまり、対象となるその人にとっての合理性を明らかにする態度と近似しているといえるのである。

西村は、ジオルジの現象学的アプローチについて、「研究の傾向などをみていて、現象学的研究をつくるといいつつ、科学主義的なものにも認められるような研究と研究方法が模索されていた。そのとき、『それでは現象学ではなくなってしまう』、あるいは、あえて現象学的研究としなくてもいいような気がした」<sup>11)</sup>と指摘している。

筆者は、現象学的アプローチとは、研究対象となる「語り」などのデータの分析にあたって、あくまでもその「個性記述的一般化」を図る方法論であると考える。本小稿では、社会人経験を経て大学教員となり、大学院博士後期課程で学び直した経験を持つ3名の現職の大学教授への聞

き取りを行っている。ジョルジに倣えば、「3人の被験者」という条件は満たしているといえよう。それでもやはり、現象学的質的研究のめざすところを考えれば、エビデンスを重視するための「生データにバリエーションを持たせること」には、あまり意味があるとは思われないのである。

現象学者の村上は、現象学的な質的研究について、誰かの経験の布置は誰かの布置と響き合う、としている。そのうえで、「ここで問われているのは（共通項や、典型的な事象という意味での）普遍性ではない。そうではなく、触発するかどうか、意味を持つかどうかということであり、そこにおいては特異な一例なのか典型的な事例なのかという区別は重要性をもたない。この〈触発する構造〉のことを、私は『真理』と呼ぶことを提案したい。[・・・] 私たちにとって真理とは触発力を持つ現象＝リアリティが生起する構造のことである」と述べている<sup>12)</sup>。また村上は、「しかし現象によって触発されるだけでは現象学にはならない。リアリティを浮かび上がらせることができるような事象の布置を明らかにすることが必要になる」とも述べている<sup>13)</sup>。

筆者が本研究において確信を持つ拠り所としたのは、「語り」を読み返すなかで、村上による、「触発力を持つ現象＝リアリティが生起する構造」として受け取った語りの部分そのものであった。つまり、意識に直接与えられるもののみを認識の確かな根拠とするという現象学の考えに基づき、経験はあくまでも意識のなかでその意味を獲得していくものとみなしたのである。

また、研究者のいわゆるメタレベルの視点からの分析を超えて、現象学的アプローチによる聞き取りの「語り」（トランスクリプト）自体が、研究者にとっての「意図せざる結果」として、読み手に触発をもたらすことも十分あり得るのではないだろうか。

いずれにしても、質の高いインタビューによって得られた「語り」のデータとは、おそらく語り手の言葉が、聞き手自身の体験や思いを触発することと同様に、読み手をも触発するものとなり得ると思う次第である。

## V. おわりに

本小稿の冒頭にて、「人生100年時代」の到来が現実味を帯び、高齢社会となって久しいわが国では、すでに生涯を通しての社会人の学び直しのあり方が模索されてきている、と述べた。また、政府等による近年の社会人の学び直しに係る取り組みでは、主に労働生産性の向上を図るべく、新たに必要とされる知識や能力等を身に付けていくことを目的としていることがみてとれること、そしてすでに、それに向けて、大学等は、提供するプログラムの改善・充実に取り組んでいることにも言及した。

実際、社会人が学び直すことによって、労働生産性が上昇し、それによって賃金も上昇する効果があることや、非就業者の就業確率が上昇する効果等がみられるといった、量的データによる調査結果が示されている<sup>14)</sup>。しかし、学び直すことの意義は、必ずしも、労働生産性や賃金の上昇といった、実利的な目的のためだけに存するわけではない。このことについては、筆者はこれ

まで別稿<sup>15)</sup>でも述べてきた。社会人の学び直しが「生産性の向上」と関連づけた費用対効果とあったことで量られるとしたら、学び直しがもたらす多様な意義や価値といった経験の厚みが霞んでしまうと考えるからである。

本小稿で聞き取りをさせていただいた3名の研究協力者は、3名とも現職の大学教授であり、年代、性別といった属性においても似通っているところが多い。また、博士後期課程の在学期間におけるAさんを除いて、学び直しの目的が実利的とは異なる方向のベクトルにあると考えられる。Aさんについても、必ずしもそう言い切れるものではないだろう。

いずれにしても、本研究における聞き取りとそれによる「語り」を読むことで、読者には社会人の学び直しの幅の広さに触れていただくことができるのではないだろうか。本小稿が、そのような機会をもたらすものであれば幸いである。

本研究の目的は、もとより、その人にとっての「学び直し」の意味や価値に、現象学的な視点から迫ることにある。したがって、明確な意図をもって取り組んだわけではないが、ここでの考察が、「生産性の向上」を主軸とする現行の施策の動向に対する、ささやかな異議申し立てになっていたとしたら、筆者には、それはまた面白い副産物だと素直に思うところである。いずれにしても、「学び直し」とは、それを行なう人にとって豊かなものをもたらしうるとの体験であると、聞き取りを重ねるにつれてその思いが増してくるのである。

最後に、聞き取りに快く応じていただいた3名の研究協力者に、心よりお礼申し上げます。

#### 引用文献、註

- 1) 文部文科省：「職業実践力育成プログラム(BP)認定制度について」  
[www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/bp/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/bp/)（最終閲覧日 2020/3/10）
- 2) 現象学的アプローチの概念については、岩崎久志：「対人援助の現象学的アプローチにおける実践者の姿勢とかかわり」、『流通科学大学論集－人間・社会・自然編－』29, No2 (2017) pp.17-33.を参照願いたい。
- 3) 本章において引用した聞き取り内容は、「一般財団法人前川ヒトづくり財団」から2018年度に助成を受けて筆者が実施した、「学び直しの現象学的研究～社会人大学院修了者の『語り』を通して～」(研究課題番号 MHF2018-A007)の一環として行ったものである。ここに記して、感謝を申し上げる次第である。
- 4) 研究協力者には、予め研究目的や方法、参加は任意であること、収集したデータの厳重な管理、そして結果の公表に際してはプライバシーが確保されることなどについて筆者(研究者)が書面および口頭にて説明し同意を得た。さらに、同意書の署名後に途中で辞退しても、一切不利益が生じないことを確約した。
- 5) Parse, R.R. et al. : NURSING RESEARCH Qualitative Methods, Brady Communications Company, Maryland, pp.15-16, 1985.
- 6) 荒川千秋・神郡博：「看護相談場面のカウンセリング効果に関する研究」、『富山医科薬科大学看護学雑誌』第2号, (1999) 133.
- 7) 岩崎久志：『学び直しの現象学－大学院修了者への聞き取りを通して－』晃洋書房, 2020年, pp.168-180.

- 
- 8) ジョルジ・A／吉田章宏 訳：『心理学における現象学的アプローチ－理論・歴史・方法・実践』新曜社，2013 年。
- 9) ジョルジの現象学的アプローチに関する記述については、松葉祥一・西村ユミ編：『現象学的看護研究－理論と分析の実際』医学書院，2014 年，pp.50-51.を参照した。
- 10) ジョルジ・A／吉田章宏 訳：前掲書（8），225.
- 11) 西村ユミ・山本則子：「【対談】現象学とグラウンデッド・セオリー」，『看護研究』48，6（2015）529.
- 12) 村上靖彦：『仙人とデートする－看護の現象学と自由の哲学』人文書院，2016 年，pp.227-228.
- 13) 村上靖彦：同上書，p.228.
- 14) たとえば、内閣府編：『平成 30 年版 経済財政白書【縮刷版】』日経印刷株式会社，2018 年，p.178.など。
- 15) たとえば、岩崎久志：前掲書（7），pp.21-22.など。